12
二葉 小 国153

教育學部
資料室

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

こくごのほん

小KC
F97

2

一年下

教科書文庫
5
810
34-1948
0130449607

寄贈
教科書文庫
5
810
34-1948
0130449607

昭和二十三年八月十五日
文部省検定済
小学校国語科用

こくごのほん 二

第一学年 下

広島大学図書
0130449607

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449607

もくろく

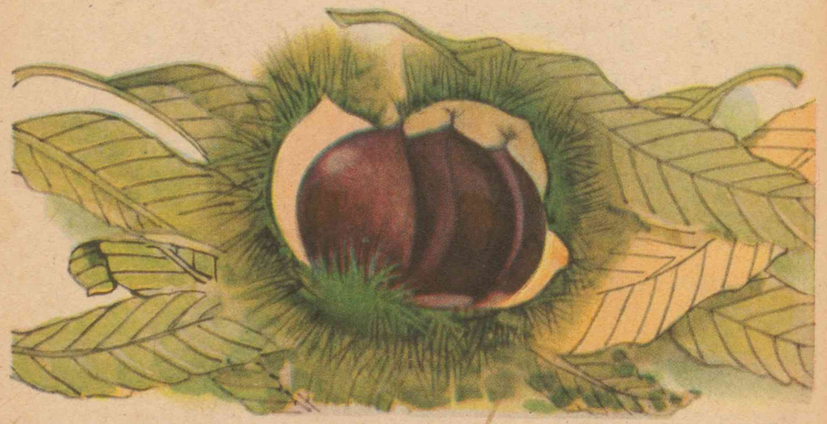
一　くりの　み……(4)
二　赤い　ゆうやけ……(10)
三　お　と……(15)
　(一)　お　と……(15)
　(二)　お月よ……(17)
四　うんどうかい……(20)
五　雲に　なったら……(26)
六　二ひきの　やぎ……(32)
七　いろはあそび……(35)
八　うさぎ……(39)
九　こぐまの　ぼうけん……(48)
十　もう　すぐ　二年せい……(67)
　(一)　ひなたぼっこ……(67)
　(二)　なわとび……(68)
　(三)　山の　中……(70)
　(四)　もう　すぐ　二年せい……(72)
おけいこの　手びき……(81)
あたらしく　でた　おもな　ことば……(84)
かんじ……(88)

一　くりの　み

ひろし「くりの　みが。」
みつお「おちて　いる。」
ひろし「いがの　ままだ。」
しげる「いがの　ままだ。」

ひろし「くりの　みが。」
みつお「のぞいてる。」
ひろし「いがの　なかから。」
しげる「いがの　なかから。」

ひろし「くりの　みを。」
みつお「かぞえて　みよう。」
ひろし「一つ、二つ、三つ。」



みつお しげる「一つ、二つ、三つ。

ひろし「くりの　みは。

みつお ひろし「いがの　なかだ。

ひろし「だきあって　いる。

みつお ひろし「だきあって　いる。

ひろし「くりの　みは。

みつお しげる「三人きょうだいだ。

ひろし「なかよし　きょうだいだ。

みつお しげる「なかよし　きょうだいだ。

ひろし「くりの　みが。

みつお しげる「えだから　おちる　とき。

ひろし「くりの　みは。

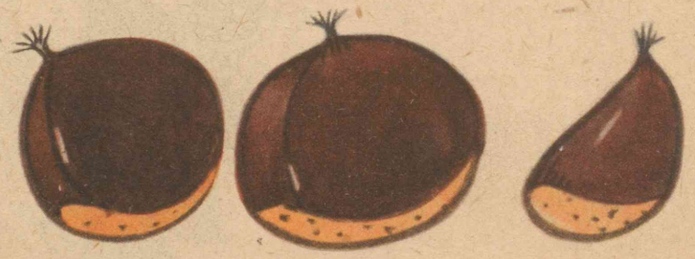
みつお しげる「くりの　みは。

ひろし「いつまでも　はなれまいと。」
みつお「かたく。」
しげる「つよく。」
ひろし「やくそく　したに　ちがいない。」
みつお
しげる「そうだ。やくそく　した
たのだ。」

ひろし「くりの　みが。」
みつお「三つ　ならんで。」

しげる「なかよしだ。」
みんな「なかよしだ。」

ひろし「くりの　みを。」
みつお「三つ　ならべて。」
しげる「秋の　日は　あたたかい。」
みんな「秋の　日は　あたたかい。」



二　赤い　ゆうやけ

はげいとうの　赤い　はに、赤い　とんぼが　一ぴき　とまって、やすんで　いました。

ひとりの　子どもが　それを　みつけて、こっそりと　ちかよって　きて、とんぼの　しっぽを　つかまえました。

ぶうぶうと、とんぼは　はねを　ならしましたが、もう　もう　まに　あいませんでした。子どもは　はねに　手を　かけながら、にわから　こえを　かけました。

「おかあさん、いと　ちょうだい。」

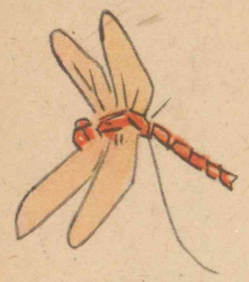
おかあさんが　えんに　でて　きて、子どもに　いと　を　くれました。とんぼは　いとに　つながれました。

子どもは　いとを　ゆびに　まきつけて、とおりの　ほうへ　でて　いきました。子どもたちが、おおぜい　あつまって　あそんで　いました。

ちょうど　まっかな　ゆうやけが、あたまの　上まで

ひろがって いて、いとの
とんぼと おなじ とんぼ〃
が、なんびきも、あかるい
空を まって いました。
どの とんぼも、みな、赤〃
い ずぼんを はいて い〃
ました。はねを のばして、
いったり きたり して
いました。
空の とんぼを ながめ〃

たり、なかまの 子どもと いっしょに かけたり し〃
て いる うちに、子どもは うっかり いとを はな〃
して、とんぼを にがして しまいました。
からだに いとを つけたまま、とんぼは とんで
いきました。
とんぼは、どちらへ いったでしょう。空へ にげて〃
も、いとは からだに ついて い〃
ました。いとの はしが、でんしん〃
ばしらの はりがねにでも からま〃
りついて いないでしょうか。もし



そう なったら、どうでしょう。それっきり どこへも
とんでは いかれません。よなかに なっても、そこに
そう して いるより ほかは ありません。雨が ふ〃
っても、そこに そう して、ぬれながら いるより
ほかは ありません。
赤い ゆうやけ。
むらでも まちでも、どこへ いっても 赤い ゆう〃
やけ。
こんな とんぼが、まだ 二三びき、どこかに いる〃
かも しれません。

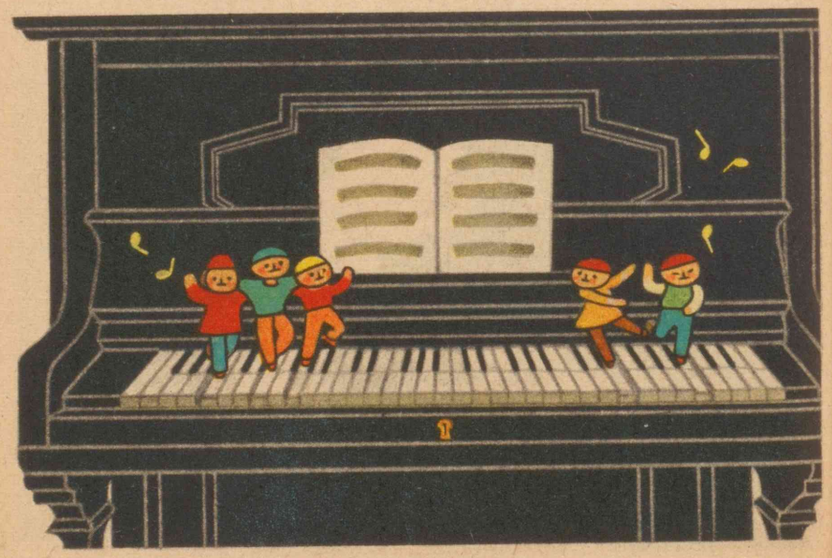
三 おと

（一） おと

ぽろん。

ぴあのって、

いい おとね。

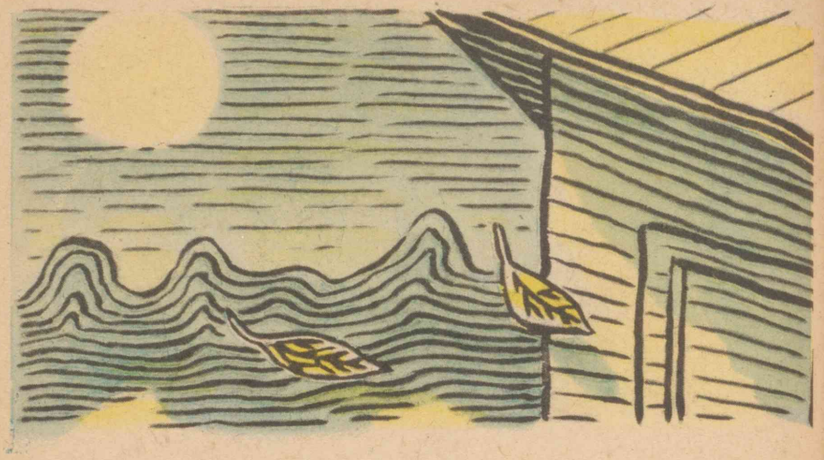


ぽろん。

ぴあのの　おと、
どこへ　いくの。

ぽろん。

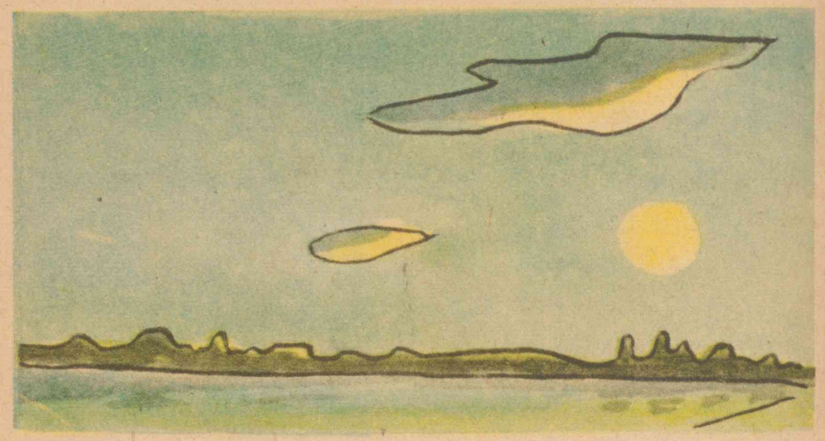
あの　おと、
ちょうだい。



（三）　お月よ

とん、
とん、
とん、
あけて　ください。
どなたです。
わたしゃ　木の　はよ。
とん、ことり。

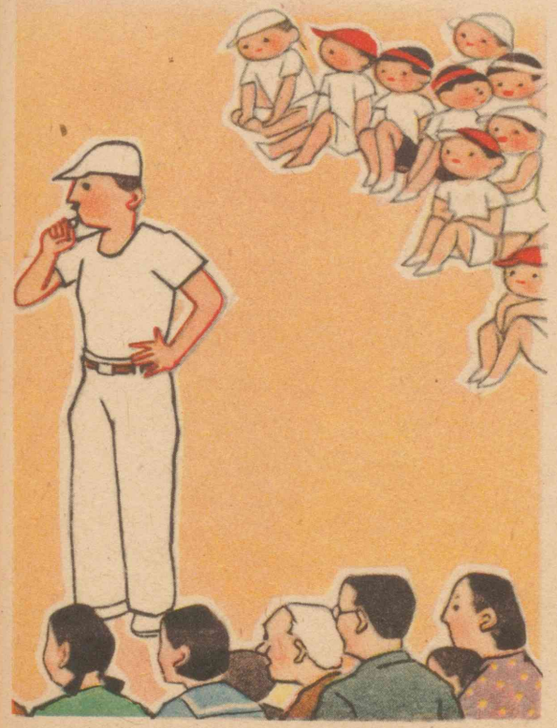
とん、
とん、
とん、
あけて　ください。
どなたです。
わたしゃ　かぜです。
とん、ことり。



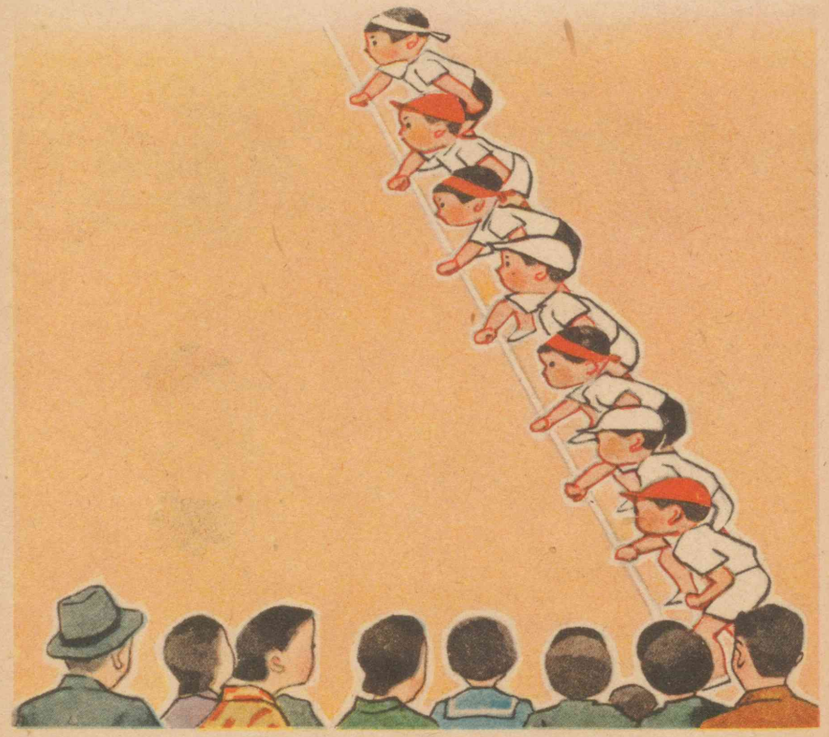
とん、
とん、
とん、
あけて　ください。
どなたです。
月の　かげです。
とん、ことり。

四. うんどうかい

ぴいっ。
ふえだ、
よういだ、
がんばるぞ。
一れつに
ならんだ
ぼくらの



くみだ。
かけるぞ、
五十めえとる、
白い
てえぷだ。
赤、青、
白、き、
目あての
はただ。

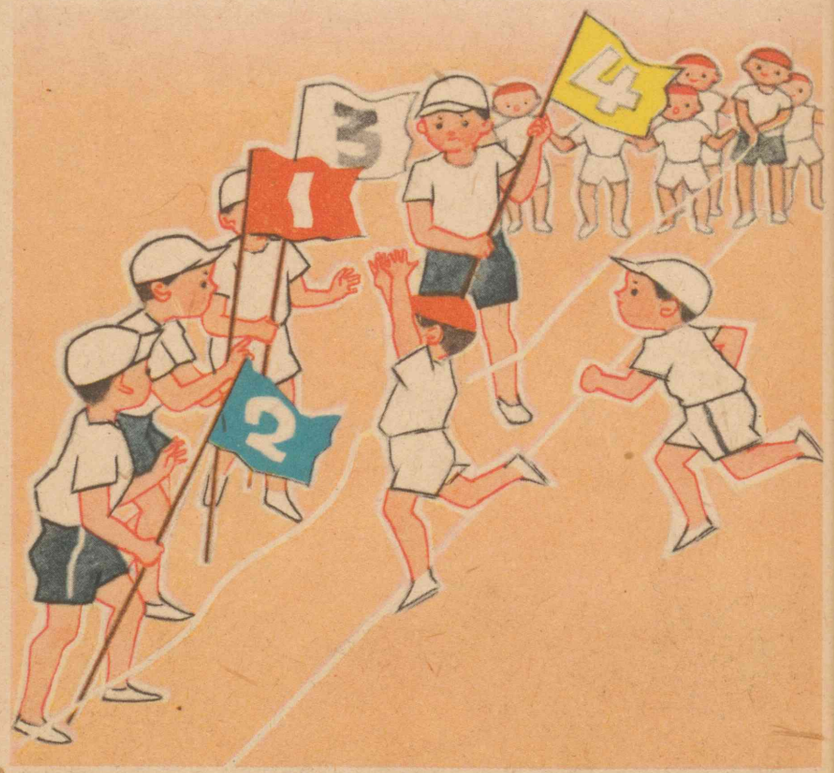


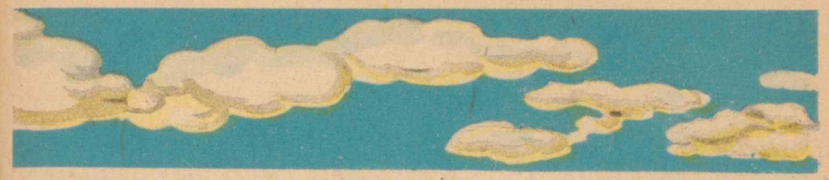
せんせいだ、
おかあさんだ、
ねえさんだ、
おともだちだ。
みんな、
こっちを、
みて
いるぞ。

よういー、
どん。
かける、
かける。
みて　いる
人は、
もようだ、
なみだ。

がんばれ
わあっ。
がんばれ
わあっ。
五十めえとる、
そら、
そら、
そこだ。

一ちゃく、
二ちゃく、
三ちゃく、
四ちゃく、
はた、はた、
はた、はた、
うれしい、
一ちゃくだ。





五　雲に　なったら

雲に　なったら、ぼくは、
おうちの　やねよりも、火〃
のみの　やぐらよりも、お〃
ふろやさんの　えんとつよ〃
りも、山の　てっぺんより〃
も　ずうっと、ずうっと、
たかい　ところへ、あがっ〃

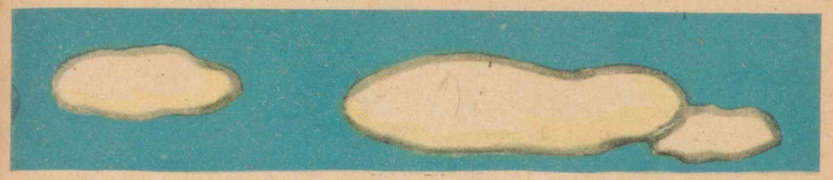
て　いきます。

でも、あまり　とおい
ところへは　いきません。
いつも、おかあさんが　み〃
える　ところから、
「ぼく、ここに　いますよ〃
う。」
と、おかあさんを　よびま〃
す。おかあさんは、きっと、

あの　やさしい　目で、空の　上の　ぼくを、みて　くださるでしょう。

おかあさんが、おしごとに　むちゅうに　なって　いらっしゃる　とき、ぼくは、ふうせんのように、ふわり　ふわりと、とおい　ところへ、とんで　いきます。めずらしい　ものを、たくさん　みて　きて、あとで、おかあさんに、くわしく　おはなしして　あげます。

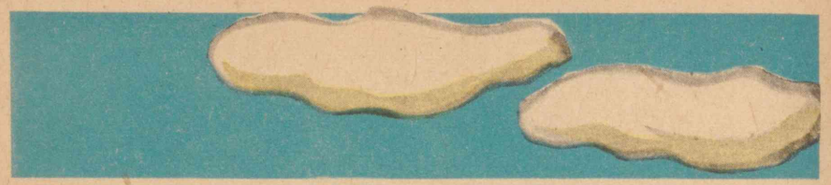
花の　つぼみが　ひらく　とき、草や　木や、はたけに　つくった　ものが　のびる　とき、



「雨が　ほしい。雨が　ほしい。」

と　なく、かえるの　こえを　きいたら、すぐ　そこへ、どっさり　雨を　ふらして　あげます。

でも、たかげたや、じょうぶな　くつの　ない　子が、

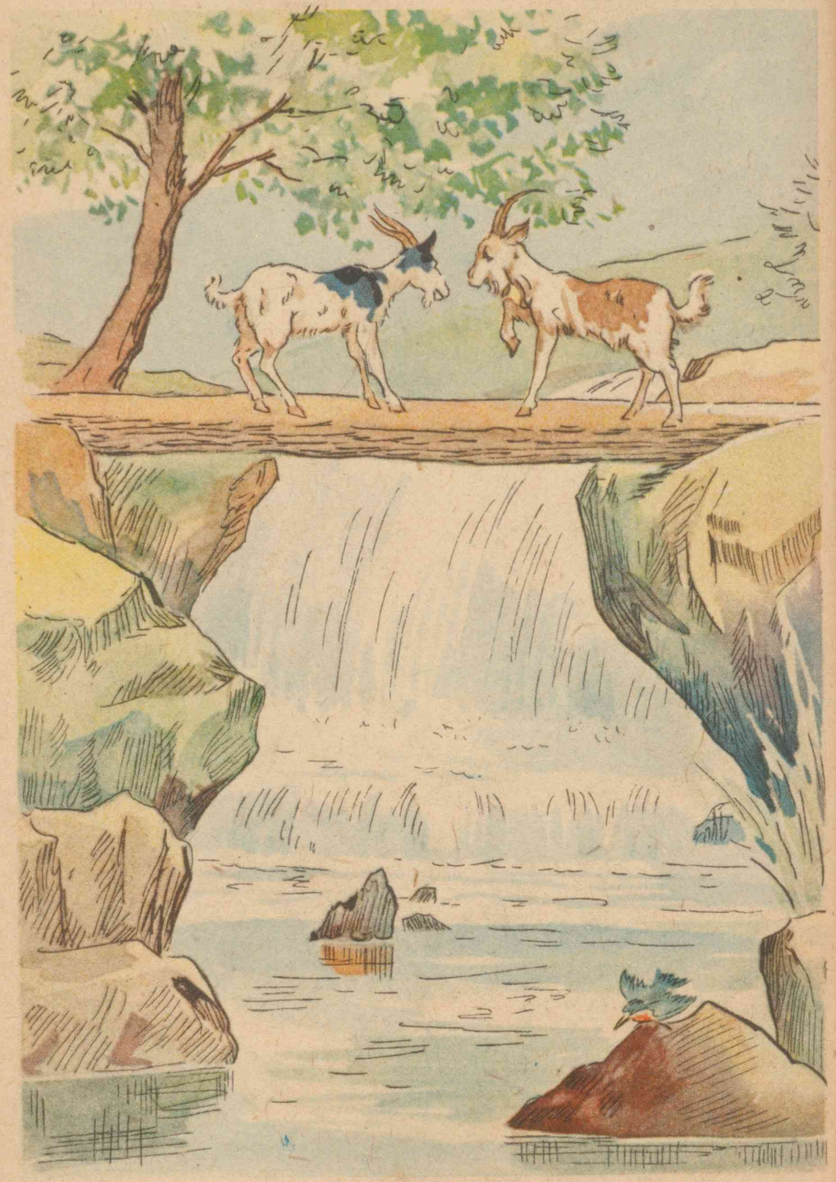


「雨ふりの　日は、いやだなあ。」

と　いう　ときには、すぐ　やみます。あおむいて、空を　みる　目じるしに　なるだけの、はねのような、白い、きれいな　雲に　なって　います。

六　二ひきの　やぎ

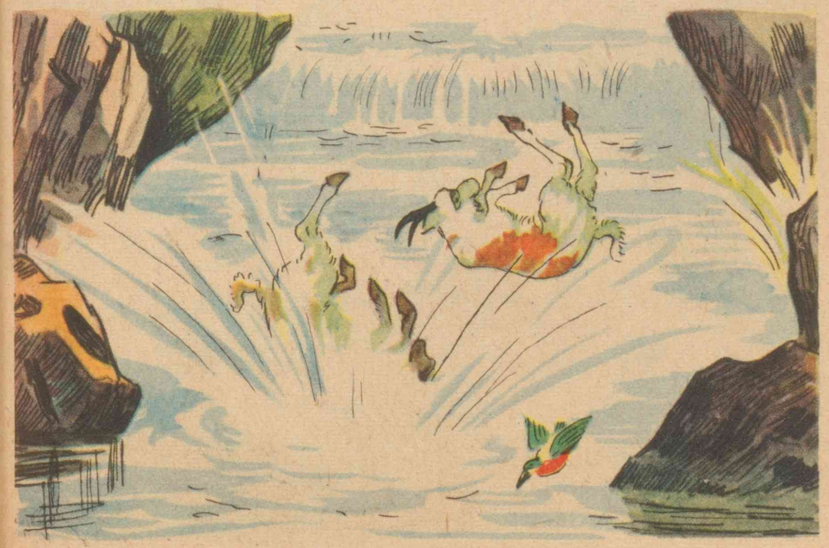
たに川に　まる木ばしが　かかって　いました。
二ひきの　やぎが　やって　きて、りょうはしから
わたりはじめました。
二ひきの　やぎは、はしの　まん中で　であいました。
「ぼくが　さきに　わたるんだよ。じゃまだから　のいて　くれたまえ」。
「いや、ぼくが　さきだよ。きみこそ　のいて　くれた」



まえ。」

あぶない　はしの　上で、つのつきあいを　はじめました。

二ひきとも　足を　すべらして、たに川に、どぶん と　おちこんで　しまいました。



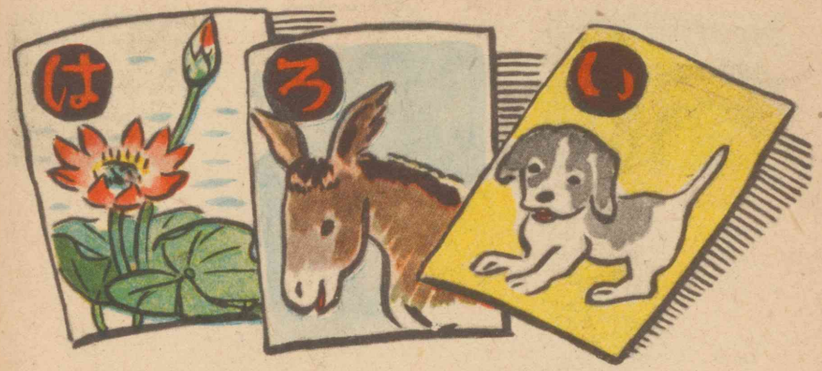
七　いろはあそび

「いの　つく　もの　なあに。」

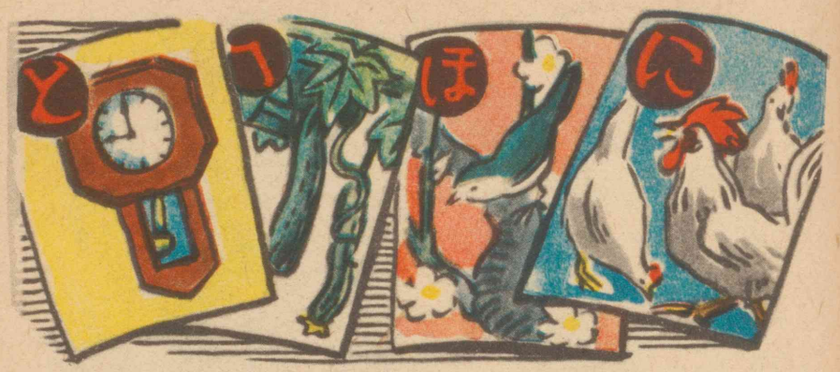
「いぬ、いえ、いか、いかけやさん、いけ、いし、いしやさん、いす、いしゃ……。」

「まだ　まだ　あるよ。」

「いた、いたち、いちば、いちご……。」



「どっさり　あるよ。いも、いね……。」
「ねえさん　まって。ぼくが　いうから〃
ら……。いと、いりまめ、いろり、い〃
わ、いわし……。」
「よく　かんがえたね。」
「ねえさん、ぼく、とても　いい　こ〃
とに　きが　ついたよ。」
「なあに。」
「いろはがるたを　つくろうよ。ぼく〃
が　ことばを　かんがえるから、ね〃



えさんは、えを　かいてね。」
「はい。」
あきらさんは、かるたの　大きさに
がようしを　きりました。それから、
その　かるたに、ことばを　かきはじ〃
めました。
いぬは　わんわん。――ろばの　みみ
ながい――はすの　花が　ひらいた。
――にわとり　三ば――ほうほけきょ〃
は　うぐいす――へちまは　ながい。

——とけいは　九じだ。

「なんまい　あるか、かぞえて　ごらんなさい。」

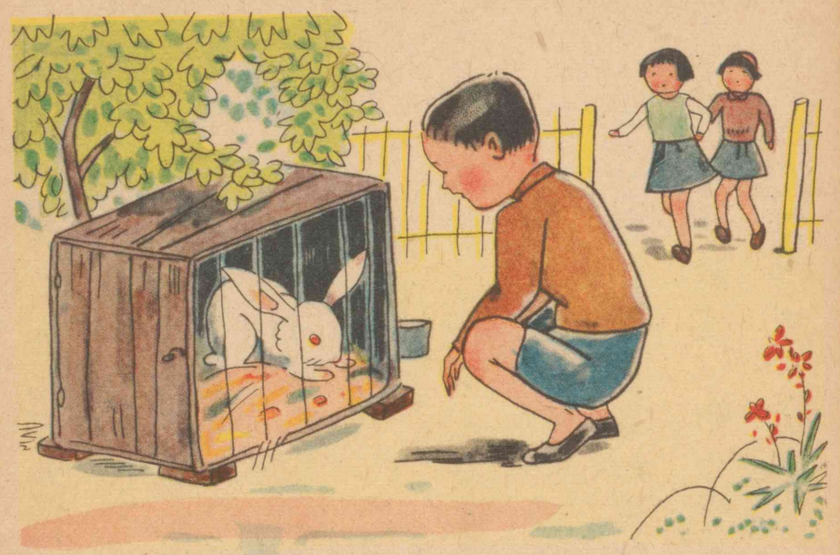
「二、四、六、七、七まい　あるよ。」

「いろはにほへとは、いろはうたの　はじめですよ。」

「ねえさん、いろはは　うたなの。」

「うたですよ。」

「さあ、えを　かきますよ。あきらさんも、てつだって　ちょうだい。できたら、みつ子を　いれて、かるたと　りを　しましょう。」

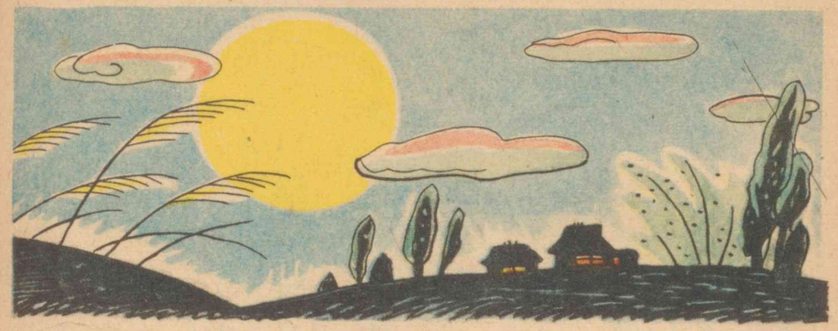


八　うさぎ

うさぎの　はいって　いる　はこの　まえで、あきらさんが　しゃがんで　うさぎを　みて　います。ちよ子さんと　みつ子さんが　あそびに　きました。

ちよ子「あきらさん、なに　して　いるの。」
あきら「うさぎを　みて　いるの。とても　かわいいよ。
　みて　ごらん。」
みつ子「まあ、かわいい　こと。この　うさぎ、いつ
　きたの。」
あきら「きのう、おじさんの　うちから　もらって　き
　たんだよ。」
ちよ子「まだ、子どもね。」
あきら「うまれて　やっと　四十日に　なったばかりな
　んだって。」

みつ子「なまえは、なんと　いうの。」
あきら「白いから、ゆき子と　つけたのさ。」
みつ子「からだが　まっ白で、目の　ところが　まっか
　だから　きれいだわ。」
ちよ子「耳の　中も　もも色で　きれいだね。あら、耳
　を　ぴんと　たてたわ。」
あきら「ぼくたちの　はなしを　きいて　いるんだね。」
みつ子「うさぎさんに、わたしたちの　ことばが　わか
　るかしら。」
あきら「そりゃあ　わかるさ。だって、むかしから、お



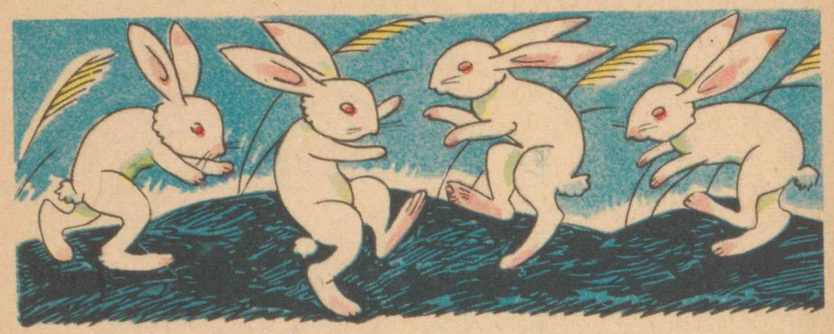
とぎばなしにも　たくさん
でて　きて、にんげんと　は〃
なしを　して　いるんだもの。」

ちょ子「じゃあ、うさぎさんと、おは〃
なししましょうよ。」

あきら「ああ、しよう。」

みっ子「うさぎの　ゆき子ちゃん、あ〃
なたの　ごせんぞは　だれか
しって　いるの。」

あきら「しらないの。」



ちょ子「しらなければ、おしえて　あ〃
げるわね。あなたの　ごせん〃
ぞは——。」

みんな「お月さまの　うさぎ。」

みっ子「わかったでしょう。」

みんな「ね、わかったでしょう。」

ちょ子「お月さまの　うさぎさんは、
おどりが　とても　じょうず〃
なのよ。」

みっ子「ゆき子ちゃん、おどりを　お〃

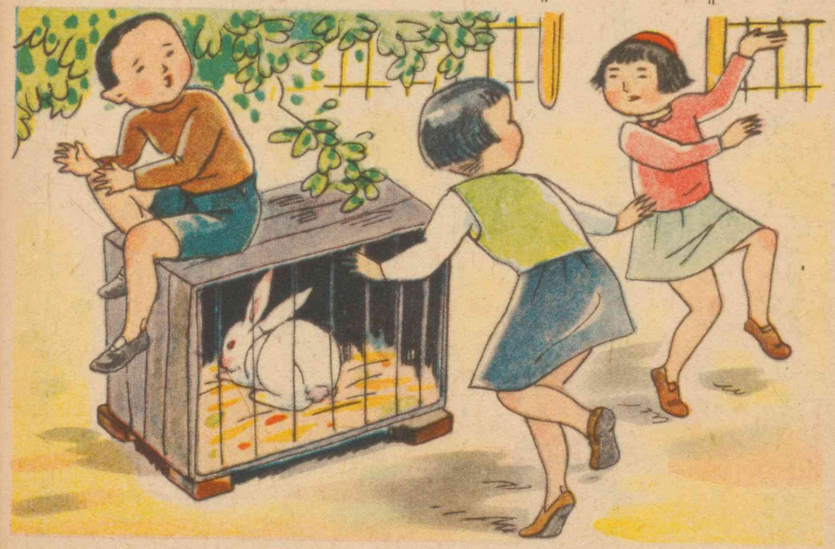
しえて、あげるから、
よく・みて　いて　おぼえなさいね。」

あきら「ぼくが　うたって　あげよう。」

ちよ子「それでは　みつ子さん、おどりましょう。」

あきら「一　二の　三。」

あきらさんが　うたって、



ちよ子さんと　みつ子さんが　おどります。

うさぎ　うさぎ、ぴょん　ぴょん　はねる。
なぜ　ぴょんと　はねる。ぴょん　ぴょん　はねる。
ことしは　ほう年、草の　み・木の　み、
みな　ぴょんと　はねる。ぴょん　ぴょん　はねる。
わたしも　いっしょに、ぴょん　ぴょん　はねる。

あきら「あら、ゆき子ちゃん、あっち　むいてるよ。」

みつ子「この　うさぎ、おどりが　きらいなのか　しら。」

ちょ子「まだ　子どもだから、あきっぽいのよ。」

あきら「じゃあ、あした　また　おしえて　やろうね。」

みつ子「ええ、そう　しましょう。」

ちょ子「なかよしに　なった　しるしに、草を　やりましょう。」

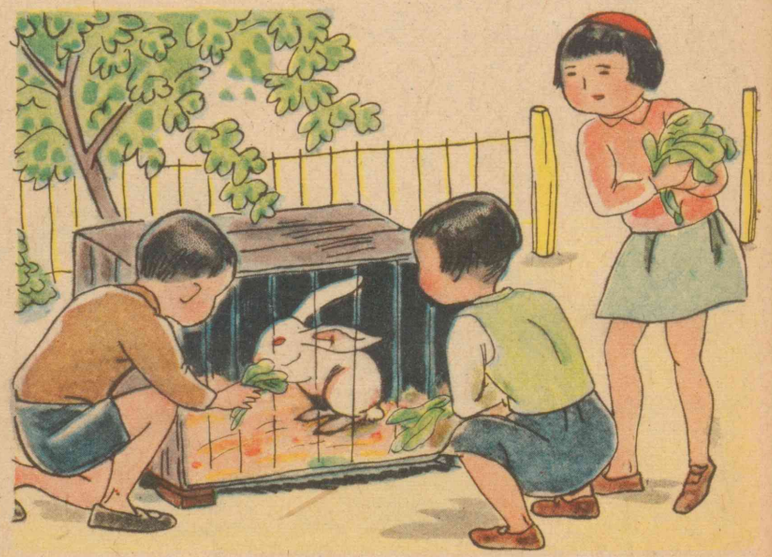
みつ子「わたしも　やるわ。」

ちょ子さんと　みつ子さんとは、草を　とって　やります。

ちょ子「ゆき子ちゃん、なかよしに　なりましょうね。」

みつ子「わたしとも　なかよしに　なりましょうね。」

あきらさんと　みつ子さんと　ちょ子さんは、また　草を　とって　やります。



九　こぐまの　ぼうけん

人の　すんで　いる　ところ〃から、ずうっと　はなれた　と〃おい　ところに、大きな　山が　ありました。

山には、木や　草や　花が、たくさん　たくさん　ありま〃した。

でも、ひゅうっと　さむい　風が　ふいて、それから　ちら　ちら　ちら、雪が　ふって　くると　冬——。

冬が　きたのです。

山は　青い　きものを　ぬいで、まっ白な　きものに　きかえま〃した。

この　山の　おくに、ことし　うまれた　かわいい　こぐまが　いました。きょうも、たべものを　さがしに　いった　おかあさんを、

まって いました。
「早く かえれば いいのに。ぼく、さみしいなあ。おかあさんあん——」。
こぐまは、あなの いりぐちから かおを だして、あたりを みまわしました。いくら みても、おかあさんの すがたは みえません。
そこには、ただ おかあさんの 足あとだけが、ながく ながく むこうの ほうへ つづいて いるだけ

です。
いくら まっても、おかあさんが かえらないので、こぐまは、たいそう さみしく なって きました。
いつも、おかあさんは でかける とき、
「ひとりで そとへ ててはいけませんよ。おかあさんの かえるまで、じっと まって いるんですよ。」
そう こぐまに いって でかけるのでした。でも、いま、こぐまは、あんまり おかあさんの かえりがおそいので、さみしく なって、
「ちょっと ぐらいなら いいだろう。」と おもって、ち

ょこ ちょこ、おうちの そと〃へ はいだしました。そして、高い ところへ あがって、そ〃の へんを みわたしました。

「うわあい、とても いい け〃しきだなあ。むこうの 山も、こっちの 谷も、雪ばかりだ。雪で どこも まっ白だ。」

こぐまは、あんまり けしきが よいので、びっくりしました。そのうちに、お日さまが、雲の 中から で〃

て きました。

「やあ、むこうの 山が、ぎん色に ひかって きたぞ。あの きれいな 山の むこうには、なにが あるん〃だろうなあ。」

こぐまが むちゅうに なって、とおくの 山を な〃がめて いると、おしりの 下の 雪が、からだの あ〃たたかみで、だんだん とけはじめました。こぐまは、そんな ことは、ちっとも しりません。

「ぼく、早く 大きく なって、ずっと むこうの ほ〃うまで、いって みたいなあ。」

そう いって、おも〃わず、せのびを したときです。

「あっ。

山の 上から、つる

つる どしいん—。

こぐまは、ふかい 谷そこへ すべりおちたのです。

「ええん、ええん、ぼく、こんな うすぐらい 谷そこ〃で、ひとりぼっちで いるのは いやだよう。ええん、ええん、ええん。」

こぐまは、ひとりで ないて いました。

しばらく すると、あたまの 上で、

「これ これ、どう したの。」

と いう こえが きこえま〃した。

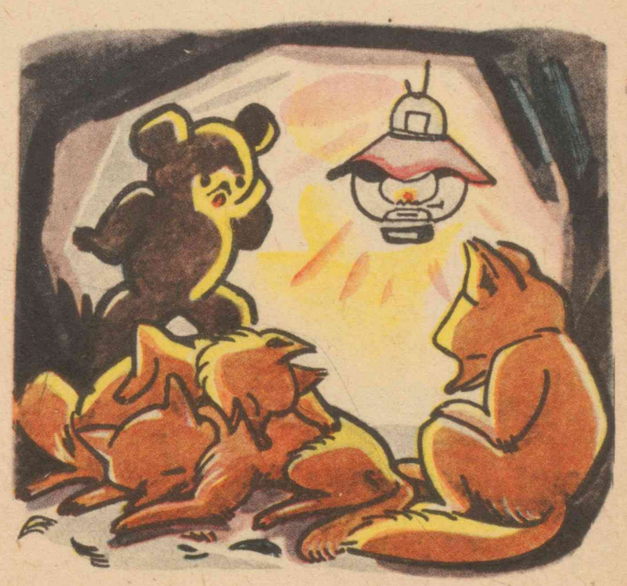
みると、一ぴきの きつね〃が、なにか かついで 立っ〃て いました。

きつねは やさしい こえ〃で、

「なに、この　山の　上から
おちたって。なかないでも
いい、なかないでも　いい。
ほうれ、こんな　ごちそう
が　あるんだよ」。
きつねの　おじさんは、そ
う　いって、大きな　にわと
りを、こぐまの　まえに　だ
しました。こぐまが　大よろこびで　とろうと　すると、
「こら　こら、おまえ　ひとりに　やるんじゃない。わ

たしの　うちまで、ついて
おいで。どっさり　わけて
あげるよ」。
こぐまは、それを　きくと、
だまって　きつねの　あとか
ら　ついて　いきました。
きつねの　うちは、谷そこ
の　くらい　ところに　あり
ました。
いえの　中には、大ぜいの　子どもの　きつねが　ま

って いました。子どもの
きつねは、おやぎつねの
もって きた にわとりを
みつけるが 早いか、
「ぼくんだよう」。
「わたしんだよう」。
と、たいへんな けんかを
はじめました。そして、に
わとりを、すっかり たべて しまったのです。おなか
が 一ぱいに なると、きつねの 子どもたちは こぐ



まの みて いる まえで、
「ぐう ぐう ぐう」。
と、いねむりを はじめました。
なんと まあ、おぎょうぎの わるい 子どもたちで
しょう。
こぐまは かんがえました。
「こんな ところに、いつまでも いたら、たいへんだ。
ぼくも この きつねのような、いじわるで、よくば
りで、おぎょうぎの わるい 子に なって しまう。
早く かえろう」。

こぐまは、さっさと、きつねの　うちを　でました。
そして、もう　一ど　高い　ところに　あがって、
「ぼくの　おうちは、どこ〃
だろうなあ。早く　かえ〃
らないと、だんだん　お〃
日さまも　しずみかけて
いるし、おかあさんだっ〃
て、きっと　しんぱい
して、さがして　いるだ〃
ろう。こまったなあ」

と　つぶやきながら、おうちを　さがして　いました。

ずどうん。
とつぜん、耳が　つんぼに　な〃
ったかと　おもわれるような　大〃
きな　おとが　しました。
りょうしが　こぐまを　みつけ〃
たのです。そして、よい　えもの〃
が　あったとばかり、てっぽうで
うったのです。
こぐまは、雪の　上に　たおれ〃

ました。

「あたったな。

りょうしが、こぐまの

そばへ　はしりよろうと

した　ときです。

おやっ。

りょうしの　耳に、さく〃

っ、さくっと、雪を　ふみ〃

しめて、だれか　ちかよって　くる　足おとが　きこえ〃

ました。ふりかえって　みると、それは、大きな　大き〃

な　おかあさんぐまでした。

おかあさんぐまは、さっきか〃

ら、こぐまを　さがして、や〃

っと　ここへ　きたのです。

りょうしは、いそいで　木〃

の　かげに　かくれました。

からだを　かがめて、そうっ〃

と　ようすを　みて　いました〃

た。おかあさんぐまは、こぐまを　しっかり　だきかか〃

えて、こぐまの　かおに、じぶんの　かおを　すりよせ〃

て います。きっと たいじな 子どもが、うたれて
しんだと おもって、ないて いるのでしょう。
その ようすを みた りょうしは、おもわず つぶ"
やきました。
「ああ、かわいそうな ことを した。」
でも、よい あんばいに、こぐまは、りょうしの た"
まに あたったのでは なかったのです。
たまの おとに びっくりして、きを うしなって
たおれただけで ありました。
しばらく して、こぐまは やっと きが ついて、

目を あけて みました。
「ああ、おかあさん。」
こぐまは、おかあさんを みると、うれしく なって、
おもわず しがみつきました。
「ねえ おかあさん、ぼく びっくり して たおれた"
だけさ。おかあさん、ないたり して いや いや。」
「いいよ いいよ。そんなに なみだを ふいて くれ"
なくっても。なみだなんか、もう でなく なったよ。」
こぐまと おかあさんぐまの ようすを さっきから
みて いた りょうしは、なにを おもったのか、てっ"

ぽうを　さかさに　かつぐと、そ゛のまま、だまって、山を　おりていきました。

りょうしも、じぶんの　うちにまって　いる　子どもに　早くあいたく　なつたのでしょう。

こぐまは、おかあさんぐまに、おんぶを　して、おう゛ちの　ほうへ　かえって　いきました。

くれがたの　空には、いつの　まにか、ほしが　二つ三つ　でて、おや子の　くまを　みおくって　いました。

十　もう　すぐ　二年せい

（一）日なたぼっこ

かぜの　ない　日。
わたしは　かべに　もたれて
日なたぼっこを　して　います。
ぴあのの　おとが、
こうどうから　ひびいて　きます。
ぴあのの　うた、

おもしろいな。
あの　うた、
二年せいに　なったら　ならうのかしら。
わたしは　くびを　まげて　ひょうしを　とりました。

（二）なわとび

にわで　なわとびを　しました。
ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、

よく　とべます。
うたを　うたって　とびました。
もう　すぐ　二年せいに　なるん"
だから、なわとび　するのが　いい　きもちです。
うたを　うたって　とぶと、
もう　二年せいに　なったようです。
ぽん、ぽん、ぽんと、
空まで　とんで　いけそうです。

（三）山の中

山を　のぼって　いくと、
「ちち、ちち、ちちち。」と、
小とりの　なきごえが
きこえて　きました。
山の　中まで　しみこむよう
な小とりの　なきごえです。
はるに　なったから、

ないて　いるのでしょう。
しずかな　山の　中、
山の　中は　もう　あたたかい。
山の　みちを　ひとりで　あるいて
いくと、なんだか、花の　いい
においが　して　くるようです。
二年せいに　なる　ころには、
この　山　いっぱい　花が
さくでしょう。

（四）もう　すぐ　二年せい

がっこうから　かえって、くらの　よこで　ほうきに
する　わらを　つみあげました。
大きな　こえで　うたを　うたいながら、
わらを　つみあげて
いると、うしろに　おばあさんが　くわを

かついだまま　立って
いました。
「大きな　こえで、なにを　うたって　いるの。
たいへん　げんきが
いいね。」
と　いいました。ぼくは、
おばあさんが　そばへ
きたのを　しらずに　いたので　びっくりしました。
「おばあさんだったの。ちっとも　しらなかったよ。」

と いうと、おばあさんは くわを おろしながら、
「だいぶん まえから きいて いたよ。じょうずだね。」
と、にこにこしながら いいました。ぼくは、
「二ねんせいに なったら、もっと じょうずに うたえるよ。」
と いって、また げんきよく うたいました。おばあさんは、
「よく おけいこ して きたね。どれ、おばあさんも いっしょに しようかね。」
と いいました。

ぼくは、おばあさんが ほめて くれたので うれしくなりました。
「おばあさん、きょうは ずがも かえして もらったし、ちょうめんにも たくさん まるを もらったよ。みてね。」
と いうと、おばあさんは、
「よし よし、みて あげよう。」
と いいました。
「じゃあ、すぐに もって くるから、いっしょに みようね。」

と いいながら、ぼくは、かばんを とりに いきました。

つくえの 上から かばんを とって、おばあさんの ところへ かえって きました。

ゆう日が さして、わらを つみあげて いる おばあさんの かげが、くらの かべに うつって います。

ぼくの かげも、ならんで うつりました。

「おばあさん、ここは あたたかだね。」

ぼくは おばあさんの よこへ すわって、かばんを あけました。

「おばあさん、この えは、ぼくが 山へ いった ときに かいたんだよ。」

と いうと、おばあさんは 手に とって みながら、

「ほほう、なかなか じょうずに かけたね。」

と いいました。

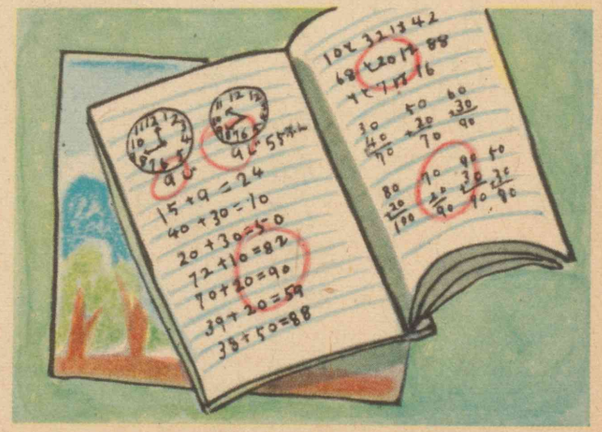
こんどは、さんすうの　ちょうめんを　だしました。きょうの　べんきょうは　よく　できたので、大きな　まるが　ついて　いました。

「おばあさん、みんな　まるだよ。」

「ほう、ほう。」

と　いって、おばあさんは、にこにこ　しながら、

「ほんとに　よく　おけいこが　できたね。」



と　ほめて　くれました。

「おばあさん、ぼく　二年せいに　なったら、もっと　べんきょうするよ。」

「もう　すぐ　二年せいだね。　うれしいだろう。」

おばあさんは、また　わらを　つみあげながら、にこにこ　して　いいました。

日が　はいって　しまっても、まだ　わらつみを　しました。

いつのまにか　わらは　山のように　なって　いました。

ぼくは　おばあさんと　あとかたづけを　して、うちへ　はいりました。

おけいこの　てびき

一の　まきで、よむ　ちからが　ついたので、二の　まきは、おもしろい　ぶんを　あつめました。じぶんの　ちからで、よく　よんでください。

一　くりの　み

(1)　やくわりを　きめて、たかい　こえで　よみあいましょう。

(2)　□の　なかへ　じを　いれなさい。

(一)　くりの　□は　いがの　□□だ。

(二)　□の　日は　あたたかい。

二　赤い　ゆうやけ

(1)「どんぼは　どちらへ　いったでしょう」。(13ページ)　それを、かんがえましょう。

(2)　あなたは、この　子どもの　したことを、どう　おもいますか。

三　おと

(1)　おと

ぴあのを　ぽろんと　ならして、このしを　いって　みましょう。

(2)　お月よ

(一)「どなたです。」と　いう　ところは、べつな　人が　よんで　みましょう。

(二)「月の　かげ」と　いうのは、「月のひかり」の　ことです。そう　いう　ことばが　ほかに　ありますか。

五　雲に　なったら

(1)　雲に　なったら、どんな　たかいところへ　あがって　いこうと、いっ

て いますか。

(2) どんな ときに、「どっさり」雨を ふらして あげますか。

(3) どんな ときに、「すぐ やみます」と いって いますか。

(4) あなたも、「なにに なったら」と いう おはなしを して ごらんなさい。

六 二ひきの やぎ

(1) 二ひきの やぎは、はしの まん中で、なんと いいあいましたか。

(2) あなたは、この 二ひきの やぎを、どう おもいますか。

七 いろはあそび

(1) ろの つくもの、はの つくもの などの、ことばあそびを しましょう。

(2) おもしろい、いろはがるたを つくりましょう。

八 うさぎ

(1) やくわりを きめて、あそびましょう。

(2) ちよ子さんと みつ子さんが おどるとき、あきらさんは、なんと うたいましたか。

九 こぐまの ぼうけん

(1) あなたは、この おはなしの、どこが すきですか。

(2) りょうしは、なぜ、てっぽうを さかさに かついで、山を おりたのでしょう。

(3) こう いう おはなしを たくさん よんだり はなしたり しましょう。

十 もう すぐ 二年せい

(一) 日なたぼっこ

(1) どこで 日なたぼっこを して いますか。

(2) ぴあのの うたを きいて どう おもいましたか。

(二) なわとび

(1) なわとびを すると、どうして きもちが よいのでしょうか。

(2) すきな ところを ちょうめんに かいて みましょう。

(三) 山の 中

(1) 小とりの こえは、どんなに きこえて いますか。

(2) 山の 中は、どんな ようすですか。

(3) みなさんも、このような みじかい ぶんを かいて みましょう。

(四) もう すぐ 二年せい

(1) がっこうから かえって、どんな おてつだいを しましたか。

(2) おばあさんは、どんな ことを ほめて くれましたか。

(3) この こどもは、なぜ 大きな こえで うたを うたったり、おばあさんに えや さんすうの ちょうめんを みせたり したのでしょう。

(4) おてつだいを した ことや、はるが きた ことや、もう すぐ 二年せいに なるので うれしい ことなどを、このような ぶんに かいてみましょう。

(5) 一年せいで ならった かんじを そらで かけるように、おけいこ しましょう。

あたらしく　でた　おもな　ことば

あい(ません) 35
あかるい 4
秋 14
あけ(て) 34
あした 50
あたたかい 79
あたり 50
あとかたづけ 9
あな 46
あぶない 59
雨 17
い が 9
いしや 12

いす 11
いた 12
いちば 35
いと 35
いねむり 11
いも 35
いやだ 36
いろり 31
いわ 36
うしなっ(て) 36
うしろ 64
うた 72
うたっ(て) 38

うっ(た) 44
うって 61
えだ 76
えもの 7
えん 61
えんとつ 11
おおぜい 26
大きさ 11
おく 37
おそい 49
おと 51
おどり 15
おなか 43

おなじ 58
おぼえ(なさい) 12
おろし(ながら) 44
かいた 74
かえし(て) 77
かがめ(て) 75
かぞえ(て) 63
かたく 5
かつい(で) 8
かばん 55
か べ 76
かるた 67
かわいい 37
かわいそうな 40
かんがえる 64
きこえ(ました) 36

きっと 55
きもち 69
きもの 49
きらいな 45
くつ 30
雲 26
くら 72
くれがた 66
くれた 75
くわ 72
くわしく 29
けしき 52
げんき 73
こうどう 67
こっそりと 10
こと 36

ことば 36
こまっ(た) 60
こころ 71
こんど 78
さがし(に) 49
さして 76
さみしく 51
さむい 49
さんすう 78
しずか(な) 71
しっ(て) 42
しっかり 63
しばらく 55
しらずに 73
しみこむ 70
じょうずな 43

じょうぶな 30
しるし 46
白 21
しん(だ) 64
しんぱい 60
ずが 75
すがた 50
すっかり 58
すん(で) 48
そうっと 63
そば 62
だいじな 58
たいへんな 58
だいぶん 74
たおれ(ました) 61
谷 52

たに川 32
たべもの 49
たま 64
だまっ(て) 57
ちかよって 10
ちっとも 73
ちょうど 11
ちょうめん 75
つくえ 76
つけ(た) 13
つづい(て) 50
つぼみ 29
つみあげ(て) 72
つよく 8
でき(た) 78
てつだっ(て) 38

とけい 38
とっ(て) 46
とつぜん 61
とまっ(て) 10
なかま 13
なかなか 77
ながめ(たり) 12
なったら 68
なみ 23
なみだ 65
ならし(ました) 11
なわとび 68
におい 71
二年せい 67
にんげん 42
ぬれ(ながら) 14

のびる 29
はこ 39
はし 13
はし 32
はなし(て) 13
はなれ(まい) 8
はる 70
ぴあの 15
びっくり 73
ひなた(ぼっこ) 67
ひびい(て) 7
ひょうし 68
ひらい(た) 37
ひろがっ(て) 12
ふい(て) 49
ふい(て) 65

冬 49
ほうき 72
ほしい 30
ほめ(て) 75
まげ(て) 68
まる 75
みまわし(ました) 50
むちゅうに 28
むら 14
目あて 21
めずらしい 29
もたれ(て) 67
もよう 23
やくそく 8
やすん(で) 10
やみ(ます) 31

ゆうやけ 10
ようす 63
よこ 72
よなか 14
りょうし 61
わかっ(た) 43
わけ(て) 57
わたし 67
わたり 32
わら 72
わるい 59

秋	月	山	耳	冬
(9)	(17)	(26)	(41)	(49)
赤	白	花	色	早
(10)	(21)	(29)	(41)	(50)
子	青	草	年	高
(10)	(21)	(29)	(45)	(52)
空	雲	中	風	谷
(12)	(26)	(32)	(49)	(52)
雨	火	足	雪	立
(14)	(26)	(34)	(49)	(55)

12 二葉 小国153

ぶんを　つくられた　ひと

二　赤い　ゆうやけ……浜田広介
三(一)お　と……与田準一
三(二)お月よ……北原白秋
六　二ひきの　やぎ……イソップ物語
九　こぐまの　ぼうけん……川崎大治
ほかの　ぶんは、へんしゅうぶと
じどうの　もの。

えを　かかれた　ひと

川上四郎・小林和郎・高橋庸男
西原比呂志・伏石繁男・藤沢龍雄
耳野卯三郎・山上喜司・吉沢廉三郎

こくごの　ほん　二(小学校第一学年後期用)

昭和二十五年四月五日印刷
昭和二十五年四月九日発行
(昭和二十　年　月　日文部省検定済)

定価　円　錢

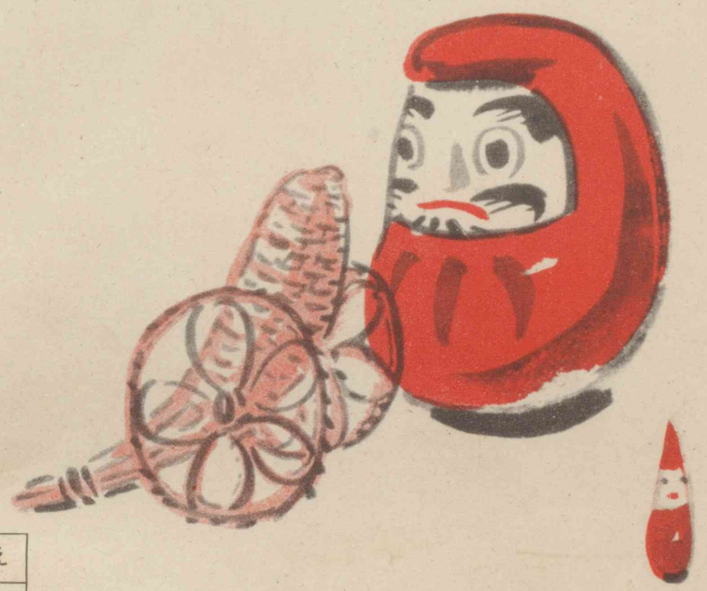
Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 6, 1950)

著作者　西原慶一　泉　節二
山下正雄　飛田多喜雄
小山玄夫　斎田　喬

発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉株式会社
代表者　大野治輔

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉株式会社
代表者　大野治輔

発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉株式会社



なまえ

広島大学図書
0130449607

二葉株式会社

文庫
48
607